

純情ラビリンス

目次

純情フビリンス

5

ぶらりあなたと温泉♨️旅行

279

純情ラビリンス

人生の転機は、どうやら突然訪れるらしい。

代わり映えのしない毎日を淡々とすごしていた日々は、私、朝比奈潤が思いつきで送ってみたテレビドラマの脚本コンクールで優秀賞をいただいた日に、終わりを告げた。

大手企業の総合職に内定も決まった、大学四年生のときだった。

あれよあれよという間に、気づけば脚本家としてデビュー。卒業後は二足の草鞋を履きながら、慣れないふたつの仕事に奔走する日々を送っていた。

初めの数年間はなんとか両立させていたが、その後、忙しさから会社を辞め、脚本の仕事のみに絞ることに。OLの仕事もそこそこ楽しかったけど、このまま両立していたら、いつか過労で死ぬと、結構本気で思ったためだった。

でも、社会人としてのマナーや会社の仕組みを学べたのは、いい経験になったと思う。

脚本家としても、めぐまれてるだろう。二十一歳のときに書いたコンクール受賞作である青春学園ドラマは、若い世代を中心に人気に火がつき、シリーズ化されることになる。その後、映画にもなつて、ここで私は一生分の運を使いきつたんじゃ……と不安になるほどだった。そして、それ

から四年で自分で言うのもおこがましいが、人気若手脚本家の仲間入りを果たした。

OL時代、ドラマで得た収入はまるっと貯金。その後波はあつたものの、脚本家として収入も安定してきたため、学生時代から住んでいた狭いアパートから、オートロックのマンションに引っ越した。

贅沢しなければ、しばらくは貯金で生活できるほどの蓄えもあり、なんとか不自由のないひとり暮らし生活を送れている。ただなんとなく大学に通い、自分がなにをしたいのかわからず、もはや悩んでいた頃に比べれば、今の私は格段に充実した生活を送っているとと言えるだろう。

だが、そうやってここ数年すごしてきた私は、現在、新たな転機を迎えていた。

「は……？　しつとり大人向けのラブストーリー？」

「そうよ！　新しい連続ドラマの企画をぜひ、あなたにやってもらいたいって、直々にご指名よー！　鼻息荒く報告してきたのは、懇意にしているテレビ局のプロデューサー、仙石恵だ。」

口調は女性だが、戸籍上は男性。しかも、黙っていればそこそこイケメンときている。美容のためジム通いに栄養管理と、そんなしょそこの女子よりも女子力が高い彼は、三十代後半にもかかわらず、肌は綺麗だし、身体に無駄な肉もついていない。ついでにこの業界では特に珍しくもない、同性愛者でもある。

呼び出されたテレビ局の会議室には、ドラマ制作部のスタッフが顔を揃えていた。そこで恵さんから手渡された企画書は、私の脳を数秒間活動停止させるには十分な内容だった。

それは当然、いい意味で。だが、悪い意味も半分くらいあったりする。

「主演女優はもう決まってるのよ。ほら、あなたのデビュー作に出演して人気に火がついた、双葉梓。あの美少女、覚えてるでしょ？ 彼女も、もう二十三歳じゃない。そろそろ学生のイメージから脱却して、働く女性を演じたいらしいのよね。まあ、新たなイメージ作りを本人と事務所が求めているのよ。で、彼女の後押しもあって、脚本家はぜひ奈々子先生で！ ってわけ」

——これはあなたにとってもチャンスよ！

そう至近距離で力説された私は、あまりの気迫に思わず顔をのけ反らせてしまった。

奈々子先生とは、私の脚本家としてのペンネームである。麻々原奈々子というのが、デビュー当時から使っている名前だ。うちは中学の頃に両親が離婚して母とふたり暮らしになり、高校に入った頃に母が再婚した。朝比奈というのは母の再婚後の姓で、その前の姓が麻々原だ。

私以上にエキサイトしている恵さんの興奮を抑えるように、私は数回頷く。

「な、名指しで、私を選んでいただけなんて。光栄ですね」

「そうでしょう!？」

喜ぶ恵さんを視界の端で捉えつつ、ばらりと企画書をめくる。私の頭の中には、「嘘、嬉しい!」という気持ちと、「マジで!? やべえ!」という相反する気持ちの波が、交互に押し寄せていた。

額に浮かぶ汗をごまかしながら、企画概要の説明に耳を傾ける。

新企画は働く女性と大人の恋愛がテーマらしい。

「恋愛と仕事の両立は、やっぱりいつの時代も独身女性の悩みどころですからね」

と呟いたのは、恵さんの部下で入社二年目の、樋高萌葱。萌ちゃんと呼ばれてみんなに親しまれている。九月とはいえまだ暑い日が続いていたけど、オシャレに秋色っぽいシャツワンピースを着ていた。

「まあ、結婚したらしたので、家庭と仕事の両立っていう、結局は同じ悩みが発生しますけどね」リア充感漂う萌ちゃんの言葉に、周りにいる恵さんの部下たちは、揃って大きく同意した。全員似たような年代だ。結婚や恋愛に関して思うところは同じらしい。

キャリアを取るか、恋に生きるか。両方のいいところ取りがなかなかうまくいかない人は、きっと多いはずだ。

仕事が忙しく、すれ違いから別れるカップルの話などは、私の耳にも頻繁に届く。

「双葉梓の事務所も、奈々子先生がそんな妙齢の女性なので、きっと同年代の感性でいい脚本を書いてくれると期待しているんですよ」

「いや、ありがたいけど、そんなに期待されても……」

キラキラした羨望の眼差しで言われれば、否定することも、この話を断ることもできなくて。終始、私の額には冷や汗が浮かびっぱなしだった。

この場を仕切っている恵さんが、バンツ！ とテーブルに両手をつく。

「奈々子先生。いい？ あなたにとってもこれはチャンスよ。新しいジャンルで知名度が上がれば、これからもっと活躍の場が広がるわ!」

——もちろん受けるわよね!？」

会議室に広がる、嫌だと言えない空気。そこはかたなく漂^{たぐよ}う高揚感。

そんな眼差しを受けて、「無理です」と断ることなどできるはずもなく、私は反射的に「はい！頑張ります！」と実にいい返事をしていた。学生時代、体育会系少女だった頃に身についたもの。習慣とは恐ろしい。

その後、一通りの説明を受けてテレビ局を後にした。マンションの五階にある自分の城へ、真っ直ぐ帰宅する。

ひとり暮らしのため部屋には誰もいないが、「ただいま〜」と呟^{つぶや}き、靴を脱ぐ。

バッグはダイニングテーブルの椅子に置き、着ていたカーディガンを脱いだ。

そのままいつも通りブラウスのボタンを外しながら洗面所へ向かい、手洗いとうがいを済ませる。その後は、1LDKの室内を歩きつつのストリップだ。

寝室にたどり着く頃には、キャミソール一枚と、フアスナーが下ろされたパンツ姿になる。

子供の頃、父が家に帰ってきて早々、服や靴下を脱ぎ散らかしていく姿に、「うわ、オヤジ」と呆れていたのに、今ではすっかり自分がそうなっている。

あの頃の自分に言いたい。帰宅したら一刻も早く、くつろげる服装になりたいものなんだよ、と締めつけのあるブラジャーは外し、そこらへんに適当においてあったTシャツを着る。そして愛用しすぎてくたびれた臙脂^{えんじ}色のジャージをはいた。

このジャージ、高校の頃からだから、かれこれ十年以上は着ているわ……。でも穴が空いてるわけでもないし、まだまだ着られるから捨てられない。

化粧は元からナチュラルメイクしかしてないのでいいとして。幅の広い柔らかなヘアバンドで顔回りの髪をすつきり上げる。完全にリラククスモードでキッチンへ向かった私は、冷蔵庫の取っ手に手をかけた。中にずらりと常備されているお気に入りのビールを一缶取り出し、プルタブをつまみ上げる。

「ふはあ〜……、ああ〜……生き返る」

しゅわしゅわとしたのだ越し、最高！ソーダや炭酸水では得られないおいしさだ。大人になってよかったと思える瞬間でもある。

スーパールの特売でまとめ買いた乾物系のおつまみもいくつか漁^{あさ}り、ビールを飲みながらソファに向かう。テレビをつけて、お行儀悪く寝そべってさきいかをつまんだ。スルメより柔らかく食べやすいさきいかと、苦味のあるビールのコンビネーションは抜群だ。

缶ビールをほぼ飲みきったところで、ようやく一息つけた私は、思考を徐々に現実に戻した。いつも通りの習慣で心の安定を得ようとしたが、冷静に考えれば考えるほど冷や汗が出てくる。じわじわと、身体の体温が奪われていく心地になり、改めて己^{おのれ}が陥^{おと}っている状況に、叫ばずにはいられなかった。

「う、うわあああ新作ドラマー！嬉しいけど、どうしようー……！」

——朝比奈潤、二十八歳、独身、彼氏ナシ。

今まで恋愛とはまったく言っていないほど無縁の生活を送って来た自分を、こんな形で呪う羽目になるとは夢にも思わなかった。

というのも、どうやら私はほかの人より、恋愛というものに興味がないらしい。周りに男性がいなかったからとか、男性恐怖症だとかというわけではない。中学・高校では共学だったのにもかかわらず、私の関心は恋愛には向かなかつた。

学生時代、私が夢中になって打ち込んでいたのはひとつだけ。部活動だ。中学から大学に入るまで、ずっと陸上二筋。怪我が原因で、本格的に走るのには大学でやめてしまったが、今でも時間を見つけては軽くジョギングをするほど、走ることが大好きだ。母親曰く、子供の頃から私は、常に走り回っている活発な少女だったそう。

怪我で潔く陸上部をやめた後、早く自立したくて、大学時代はバイトと勉学に明け暮れた。家庭事情が少々複雑なため、自分のことはなるべく自分で面倒をみたかったのだ。

色恋とは縁が薄かったけれど、そういえば一度だけ、大学時代に同じサークルの人と付き合ったこともあったつけ。でも、あれは正直付き合ったにカウントされるのか怪しいほど、清い交際だった。ぶっちゃけ、友達の延長で、カレカノではなかったと言える。なにせ手を繋いだかも怪しい。

そういうわけで、恋愛面では枯れた青春時代を送ってきた私の脚本は、必然的に恋愛とは無関係になった。

デビュー作でもあり代表作でもあるのは、学園青春ドラマ。テーマは部活動と学校行事、そして熱い友情。そこに甘酸っぱい恋はほぼ皆無だ。あったとしても、ほんのりと匂わせる程度で、どっぷり描いたことはない。というか、できない。

作品の根底には自分の今までの人生があるので、頼まれても思春期の恋愛なんて書けなかったと

思う。

そして現在、気づけば結婚適齢期に突入中。

「結婚しました！」「結婚します♡」メールを受け取ることも増え、ぼんやりと自分の年齢を意識し始めていた。

が、楽しく仕事をこなし、充実した毎日を送っているので、結婚なんて私にはまだまだ早いし、恋愛も別にどっちでもいっつか、と呑気に思っていたのだ。

実際のところ、恋愛・結婚願望はほとんどない。

だってまだ二十代だよ？ 結婚の平均年齢は高まっているみたいだし。

無理に焦って結婚したって、離婚したら意味ないじゃない。

日々の生活は、一が仕事で二がお酒、というのが今の私の現実だ。仕事の後、ビールを片手におつまみを食べつつ、だからだらすごすのが至福の時間。一杯の缶ビールを毎日飲めるだけで、お手軽に幸福感を味わえる。

……よって、本日のこの展開は、ありがたい反面、由々しき事態だ。

恋愛偏差値が低いどころか、くたびれたジャージを着て、ビールとさきいかに幸せを感じちゃってる枯れたオジサン女子に、大人のラブストーリーなんて書けるかあ！

「なんてこった……。ああもう……。しまった。ご指名は嬉しいけど、正直どうしよう」

こんなことなら、もう少し積極的に恋愛を経験してみんなだった！

なんて、過去の自分を振り返って、今さらどうしようもないことを嘆いてしまう。

若いときの恋愛をしつかりしてこなかったから、いきなり大人のラブストーリーなんて言われても、ハードルが高すぎてピンと来ないんだよ。それどころか、未知の世界すぎて考えるだけで心臓がバクバクしてしまう。適度なドキドキは刺激が得られていいそうだが、緊張でずっとドキドキし続けるのは絶対に健康によくない。

「次の打ち合わせまで、タイムリミットはあと二週間か……」

だらけきった身体を起こし、ダイニングの椅子に置いたトートバッグをソファまで持ってくる。その中を探り、手帳を取り出した。

赤いペンで書き込まれたスケジュールと内容を見て、ごくりと唾を呑み込む。

なんと、この新作ドラマ。ざっくりとした企画の方向性は決まっているが、ほとんど私の好きにやらせてくれるらしい。私のような若い脚本家に、普通そこまで任せてはくれない。ものすごい太っ腹ぶりだ。

そんな大物脚本家並みの待遇、普通なら緊張しつつも喜ぶはずだが、残念ながら今回は違う。

このテーマで丸投げされたら、逆にプレッシャーが半端ない。アイデアが浮かぶ気がさーっぱりしないんだけど。

ソファでクッションを抱きしめたまま、がつくりと項垂れた。

次の打ち合わせの日までに話の方向性だけでも決めて、持って行かないといけない。引き受けた手前、なにも浮かびませんでした、では済まされないのだ。脚本家生命に関わる。

「本当に、こんなこと言うの、ものすごい遅いけど。私、なんで恋愛してこなかったんだろ……」

私は往生際悪く、過去の自分を振り返って嘆いた。

缶ビール一本飲んだだけでは、まったく酔いは回ってこなかった。



いつまでももうじうじ考えていたって仕方がない。時間は容赦なく、そして誰に対しても平等に過ぎていく。

一日頭を抱えて呻いた翌日、私は締切明けの自分へのご褒美でよく利用する、獅子王グランドホテルに向かっていた。

そこは、脚本家としての生活が安定してきた頃から、一、二ヶ月に一度のペースで通っているホテルだ。頑張った仕事の後のご褒美として、このホテルに一泊するのが私のリフレッシュ方法になっている。

マッサージやリフレクソロジーに、プールでのスイミング。夜はイタリアンやお寿司、朝はビュッフェで食べ放題……と、めっちゃ贅沢！ ながご褒美である。着いたその日は疲れ切っているため、寝心地のよいベッドでの爆睡も、最高潮に幸せだ。

一番初めにこのホテルに泊まったのは、仕事の関係者から宿泊割引券をいただいたときだった。もしかしたら、恋人と行っておいでという意味で二枚くれたのかもしれない。でも、そんな相手がない私は、二枚とも自分で使った。

あれ以来、私はすっかりこのホテルが気に入っている。普段あまり無駄づかいをしない私にとって、この滞在は自分への最大のご褒美なのだ。

そして、心身ともにすっきり状態で翌日チェックアウト。この一泊二日の贅沢を、仕事に入っているときはいつも密かに心待ちにしていた。

だけど、今日は違う。私は初めて、切羽詰まったときの気分転換にここを訪れていた。

荷物は一泊分だから、少し大き目のトートバッグに替えの下着とシャツのみ。下は今はいてるカジュアルなパンツだけで問題ないだろう。

最寄り駅から徒歩三分。このホテルはビジネス街の中心部に位置している。

一階から二十九階までは企業専用のテナントビルになっており、ホテルはその上だ。

ビルに入れば、スリッパをびしょと着こなしたビジネスマンとすれ違う。会社勤めを辞めてから、「見るからにサラリーマン」なんて人たちを間近で見える機会がすっかりなくなってしまった。だから実は、少し懐かしい。その代わり、テレビの向こう側でしか見られなかった芸能人に会える機会は増えたが。

そんなビジネスマンが使うオフィス階用のエレベーターには乗らず、エントランスホールを突っ切り、ホテルに続く通路を歩く。大理石と思しき乳白色の床の通路を歩くと、フロントがある三階まで直通で上がれるエレベーターが二基現れる。

そのエレベーターは、流石高級ホテルと納得できる、ほとんど振動が感じられない最新式だ。乗り込んだ瞬間から、なんだか少し日常から離れた空気が味わえる。

なんだろう、静かに流れるクラシック音楽の効果だろうか。リラククス感に加え、ほのかに漂うラグジュアリーな雰囲気。狭さや圧迫感を感じさせないこの空間は、そこら辺にあるエレベーターと違うと思う。

内部の壁に貼られたホテルの案内にざっと目を通していたら、あつという間に三十階に着いた。

扉が開いた先も、大理石敷きらしいエレベーターホール。格調高く重厚な両開きの扉が、宿泊客を受け入れやすいようにとの配慮から開放されていた。

季節は九月に入ったばかりでまだ暑い。素足に歩きやすいウエッジソールのサンダルを履いた足が、軽やかな靴音を鳴らした。

フロントまで真っ直ぐ向かう途中、ホテルのベルボーイと会釈を交わした。物腰が柔らかく落ち着いた様子の彼らからは、一目でこの教育が行き届いていることが伝わってくる。

ホテルは、三十階から五十階まで吹き抜けになっている。

高級感が漂うが、華美すぎない内装だ。大きなシャンデリアなどが特徴的な海外の高級ホテルとは違う、モダンな雰囲気。シンプルで無駄な装飾はなく、かといって貧相には決して見えない。清潔感と開放感が溢れており、置かれているソファや椅子も一級品とわかる上質なもののばかり。天井から差し込む陽光に、自然と頬が緩んだ。

クラシック音楽以外に聞こえてくるのは、水が流れる涼やかな音。同じフロアの奥にあるカフェ近くには人工的な池があり、中には鯉が泳いでいる。

フロントに行けば、ちょうど壮年の外国人ビジネスマンがチェックインを終えたところだった。

振り返った白人の男性ににこりと微笑まれて、私も咄嗟に微笑み返す。なんだか映画俳優並みに素敵な人だ。

先ほどまで白人男性に流暢な英語で応対していたフロントクラークの男性スタッフに、笑顔で挨拶する。

「お帰りなさいませ、朝比奈様」

私の挨拶に返してくれる、この台詞。彼とすつかり顔見知りになっている証拠だろう。私のことを覚えていてくれるのは、なんともくすぐったくって嬉しい。

「ええ、また泊まりに来てしまいました。ついこの間来たばかりなので、久しぶりな感じはしませんね」

実は三週間ほど前に泊まったばかりなのだ。いつもより早いペースでの再訪だ。

日向、とネームプレートをつけた黒いスーツ姿の男性は、常に浮かべている柔和な微笑みをさらに深めた。お客様へのサービスマイルだとわかっている、つい見惚れてしまいそうになるほど、この人の笑顔は凄まじい破壊力だ。

「ありがとうございます。またお会いできて大変嬉しいです」

日向さんは、私より少し年上のホテルマンだ。黒いスーツに一分の隙もないピシッとした佇まい。黒い髪はすつきりと後ろに流して整えられており、見るからに誠実そうな雰囲気だ。

話し方も、落ち着いた声のトーンも、物腰が柔らかなところも……見れば見るほど仕事ができるいい男という感じだ。チェックインの手続きをしている最中、彼の仕草に目を奪われた。

……いい。彼はすぐくかついいい。

そうだ、ドラマのヒロインの相手役は、日向さんみたいな男性なんてどうだろう。

まさか、こんな身近に素敵な逸材がいたとは……！ なんて、内心の興奮を顔には出さないよう気をつけながら、私はルームキーのカードを受け取った。

「朝比奈様がお元氣そうで安心致しました」

「ああ、私いつも、ここに来るときって死にそうな顔してますもんね」

つい苦笑が漏れた。ヘロヘロになって泊まりに来る客なんて、そうそういないだろう。

書き直しは日常茶飯事の脚本家業。徹夜なんてざらだし、視聴者からの反響次第でストーリー展開が変わることもしょっちゅうだ。プロデューサーや監督の意向で、というときもある。

なので、全部になんとかOKが出た後は、めちやくちや安堵する。そんなタイミングでこのホテルに来ていた私は、毎度毎度徹夜明けの姿を見られているのだ。それは少し恥ずかしい。

「ご心配いただきありがとうございます」と頭を下げれば、日向さんは「こちらこそ、当ホテルを選んでいただき、ありがとうございます」といねいなお辞儀を返した。

完璧な角度に、まったく嫌みのない微笑。すつとした高い鼻梁も、笑うと目尻が下がり甘さが増す顔立ちも、身長の高さも穏やかな雰囲気も、すべてを記憶するように私は心のシャッターを切りまくる。

いい。考えれば考えるほど、日向さんは本当にいい。ヒロインの相手役にピッタリだよ！

次の客が現れたので会話を切り上げて、私は宿泊者用のエレベーターホールに向かった。そして、

広々としたエレベーターに乗り込む。

ガラス張りのエレベーターが上り始めると、先ほどまでいたフロントから奥のカフェまで見下ろせる。観葉植物の緑が鮮やかで、見ているだけでリラクセスできる。

最上階に近いフロアでエレベーターが停まった。もしかしたら日向さんの厚意で、いい部屋を選んでくれたのかもしれない。

部屋に入り窓に近寄れば、いつもより東京タワーが綺麗に見えた。

「これは、夜景が楽しみかも」

いつも泊まっている部屋と室内の色の基調や家具は基本的に同じなのに、何故か若干広く感じる。お風呂はガラス張りでもよつと恥ずかしいが、ひとりだから誰にも見られる心配はない。アメニティは当然充実していて、毎回満足だ。

さて、勢いで気分転換に来てしまったが、正直これからどうしようか……

高級ホテルに来れば、素敵な男性との出会いが落ちてくる！ とまでは、流石に思っていない。

けれど、普段知り合えないような人と出会えるチャンスはありそうだ。

それにここ、先ほどの白人男性みたいに、海外からの宿泊客がかなり多い。

「日向さんは確かにいいけど、選択肢は多くないよね。相手役はイケメン外国人とかもあり？ 出張で日本に来て、旅行で泊まりに来てた平凡なOLと出会い、そこから生まれるラブロマンス……」
待て、出張で来ている外国人が日本語が堪能とは限らない。それに外国人の俳優を選ぶとなると、かなり制限されてしまう。

そもそも主演女優は決まっていますが、相手役の男って決まっていなかったよね？ あれ、オーディションで選ぶとも言っていなかったし……

「私のアホ。肝心の相手役について、把握してないのか」

持ってきた鞆の中から企画書を取り出してみたら、ヒロインの相手役は未定となっていた。

大人気の若手女優、双葉梓の相手役となると、慎重に選ぶことになりそうだ。彼女の事務所は業界では有名なやり手の大手だし、今回の企画にはかなり力を入れてるとかなんとか。

やばい、ますます失敗は許されない……。いや、成功させることしか考えていないけども。

「外国人は難しいよね。やっぱり日向さんみたいなできるエリートビジネスマンを相手に持つてきて」

——度重なる偶然の出会い。初めはただ肩がぶつかった程度の、些細な出会いだった。だが次に再会したとき、付き合っていた彼氏に振られる現場を偶然見られてしまった。結婚まで考えていたのに、仕事が多忙すぎて会えずにいたら、その間に浮気を疑われてすれ違い。ほかに好きな人ができたから、もうお前とは別れたいと、こっぴどく振られて傷心状態のヒロインに、すつと手を差し伸べたのが……

「ダメだ、ありきたりすぎる。つか、これ、昔隣に住んでたお姉さんの話じゃないか」

誤解とすれ違いから生まれる恋の試練、というものは、あっさり破局という形で終結したらしい。が、お姉さんはずぐに新しい彼氏を見つけていたっけ。仕事が忙しいはずなのに、一体どんなマジック使ったらそんなに早く彼氏ができるのか、ご教示願っておけばよかった。って私、そのとき、

まだ小三だったけど。

今まで恋愛脳じゃなかった私が、いきなり恋愛モードに思考を切り替えるには無理がある。少女漫画や恋愛映画などを見て勉強しておくのも手かもしれない。けど、逆に逆に影響されてなに書いたらいいかわからなくなりそうな気もして、躊躇ちゅうちゆしてしまう。

自宅のソファより数倍座り心地のいいソファに座り、しばらく考える。そして、やはりリサーチから始めるべきだという考えに至った。

恋愛モードになんて、一朝一夕になれるものじゃない。でも、若い男女が多く集まる場所であればいいネタが拾えるかも。

この仕事、人間観察は重要である。そして書きたいテーマが決まったら、ひたすらリサーチあるのみ。その職種に就いている人に直接話を訊きに行ったり、インタビューしたりと、とにかく情報収集に励む。

なにが書きたいかすら決まっていない今、なんでもいいから面白そうなテーマを見つけ出すことが先だ。

気分転換にホテルに泊まりに来たのだから、ホテル内にあるカフェに行こう。雑誌にも載るほどの大人気のケーキセットを食べに……じゃなかった、若い女性やママムたちを観察して、なにかきっかけを見つけるのだ。

トートバッグから小さめのバッグを取り出し、携帯とお財布とメモ帳を入れて、私はホテル内にあるカフェへ向かった。

今日は土曜日。そのせいか、カフェはなかなか混んでいる。しかも、ありがたいことにカップル率が高い。

右を向いても左を向いても、男女で座るカップル。その中でひとりぼつんとケーキを食べるのは、なかなか勇気がいることだろう。

が、生憎あいにく私はおひとり様には慣れていて。他人からどんな目で見られようと、あまり気にならないうし、ひとりだと外食ができないなんていう女ではない。

秋の味覚先取りメニューと書かれている中から、定番のモンブランとセイロントイーをオーダーした。若いギャルソンにメニューを返して、さりげなく周りの人間を観察する。

年齢的には二十代から三十代の男女が一番多い。あ、でも、あの子らは見るからに十代だ。大学生か高校生か……。高校生でホテルのカフェにケーキを食べに来るって、なにそれ。今時の高校生ってこんなもん？ 誕生日には彼氏のバイト代でホテルのディナー、なんてのもあり得るかもしれない。部活少女だった私には考えられないが。

見ているだけでお腹いっぱいになりそうな光景に目をやりつつ、私はメモ帳にペンを走らせた。

「さてと。見たところ職業は、大学生や会社員ってところかな？」

ちらほらと、「学校で〜」とか、「昨日うちの部長が〜」などの会話が耳に入る。この場のカップルは、同じ学校の同級生とか、同僚が多いようだ。

あ、でもあの人たちは歳の差カップルだわ。でも、ちょっと歳の差がありすぎる気も……

男性の年齢が明らかに高く、そして顔が似ていないことから血縁者ではないと見た。女性の表情は、見るからに恋する女の子の顔。キラキラがここまで飛んできそう。深く突っ込んで考えると危険な気がするから、あのカップルはあまり意識しないでおう。

やがて、「お待たせしました」と爽やかなスマイル付きで、頼んだモンブランと紅茶がやってきた。「ごゆっくりどうぞ」という言葉に、会釈を返す。

大きすぎず小さすぎないモンブランは、上にのっている丸々とした栗が目立つ。たつぷりのマロンクリームにしっとりしたスポンジが絶妙な舌触りでおいしい。チョコで作られたスティックをつまみ、ポリポリ食べた。その間も、脳内は企画内容でいっぱい。

主演女優の年齢は、二十三歳。私より五歳年下の彼女は、美人！ というよりも、清楚で可愛らしいイメージだ。女子高生の制服が未だに似合うと断言できる、美少女という感じ。

年齢的には大人のラブストーリーが演じられる歳だけど、いきなり上級者向けの恋愛ものはハードルが高すぎる気がしなくてもない。しっとりしたラブストーリーなんて、二十代後半か三十代に入ってから挑戦しても遅くはないと、私は思う。

「要は学生のイメージから社会人のイメージにさせたってことだよ。年齢と大人を意識した作品で新たなジャンルに挑戦、ってことだもんね」

それならやつぱり、恋愛色が濃厚なものよりは、軽い話から徐々に慣れていった方が、ファンも安心なんじゃないだろうか。

「というか、今さらだけど。恋愛ものの描写って、どこまでを望まれているんだろう……」

白磁のティーカップに口をつけて、息を吹きかけながら思わず呟いてしまう。

普通、ラブストーリーでキスシーンのひとつもなかったら、見ててがっかりするよね？ ただの恋愛ごっこかよ！ って思われる。

リアリティがなくてつまらないと言われるものは、作りたくない。

となると、やはりある程度、恋愛の核に踏み込んだ話を書く必要があるわけで。でも、私にはそれを考えられる経験値が圧倒的に足りないわけで……

「あ、ああ……悩むっ」

なかなか出口が見えない迷宮に迷い込んでいる気分だ。ぐるぐると思考が渦巻く。

恋する女性のキラキラした顔を見れば、少しは自分も恋愛している気分浸れるかと思っただ、人はそう簡単には変わらない。

恋愛運のおぼれがもたらせるわけでもなく、私のメモ帳はポツネタにバツテン印がついて、ぐちゃぐちゃになっていくだけだ。

これ以上の収穫は得られそうにないと判断し、私はケーキ皿とティーカップを空にしてから、部屋に戻った。



ホテルのエステでヘッドスパを受けて、いろいろ凝り固まっている頭を柔らかくしてもらった

けで、今回は帰宅した。

ネタ探しを兼ねてホテルに泊まりに行ったが、収穫はあったのか悩むところだ。むしろ自分がいかに恋愛に無関心だったのかを思い知らされた気がする。

帰宅後、メールをチェックしてから、買って来た数冊の雑誌をコーヒーターブルに積み上げた。最新のデート情報や、男女間のあれやこれが載っている、お役立ち雑誌だ。

積極的にネタを探さないといけないので、今まで無縁だった雑誌も初めて購入した。

人で溢れる往來に行くと思像力が掻き立てられることも多いけど、残念ながら今回はそうあっさりとはいかなかった。おいしいネタは、簡単に落ちているものじゃない。

でも、日向さんとたくさん会話できたことは、ラッキーだったかもしれない。

いつもスーツをすらりと着こなして、見るからにできる男のオーラを放つ日向さん。彼はどこから見ても隙ナシで、美形だ。彼の笑顔に見惚れて、ぼうつとなった女性客を見かけたことは何度もある。

「やっぱり、トキメキだよ。相手役は日向さんみたいな男性が好ましいか」

仕事ができて、カッコいい男性。ヒロインの相手役にふさわしいじゃないか。ダメ男が相手役なんて、彼女のファンも望んでいないはず。

「でも、エリートビジネスマンでイケメンだけじゃ、弱い……。そんなありきたりな話は面白味に欠けるしなあ〜」

なにかもつとインパクトのある特徴があった方が、面白いかも。いや、ラブストーリーにギャグ

要素は求めてないんだけど。でも、ラブコメディはいいかもしれない。

仕事に関わる話とすると、無難に社内恋愛か。上司と部下、はたまた他部署の同僚との秘密の恋……。それも萌えそうだが、何故かいくつか練った設定のどれもピンと来なかった。

私がまだOLだった頃の記憶を掘り起し、憧れの先輩(♂)と可愛い後輩(♀)の社内恋愛劇を思い出してみたが、そこにモデルになりそうな要素はない。

「秘密の関係とかは定番だけど、そこに『禁断の』とかがついちゃうと、一気に昼ドラ的な……」
一応、この企画は昼ドラではない。ほっと一息つける時間帯、夜の十時を予定しているんだとか。どっかに、いいネタを持つてる人はいないのか。

唸りながらばらばらと雑誌をめくれば、プロポーズ特集が載っていた。どんなシチュエーションでのプロポーズに憧れるかという記事のほかに、理想の男性像や、恋愛相手と結婚相手に求める条件、つい夢見てしまう恋愛はどんなの？ などなど。思わず雑誌を持つ手に力が入った。

『恋愛と結婚は当然、別物。彼氏なら多少目を瞑るけど、夫なら求める条件は厳しくなる。』

(三十一歳、営業)』

『結婚相手に求めるのは、安定した収入。顔や身長は二次。(二十九歳、SE)』

『酒癖やギャンブル癖がある男性は絶対に×。また、お金の価値観が一致しない男性との生活は、』

苦勞する。(二十一歳、事務)』

すごい。皆さん、結婚観はなかなか現実的だ。

だが、恋愛するなら、多少冒険してみたい願望もある。憧れる出会いは、結構、過激なものも

多い。

芸能人とお忍びデートがしたいとか、大好きなバンドの楽屋に招待されて、メンバーに一目惚れされてみたいとか。

中にはワンナイトラブでもいいから、遊ばれてみたい！なんてつわものもいらっしやる。でも、ここで述べられている理想に共通しているのは、「運命の出会い」だった。

「運命を感じられる出会いに憧れるのか。女の子はやっぱりそういうの、好きだよね」

自分がそれに当てはまるかどうかは、ちよつとよくわからないが。でも、つい夢見てしまう気持ちとはなんとなく理解できる。

現実では滅多にありえない出会い。でも、もしそんなことが起きたら？ きつと、心ときめかずにはいられないはずだ。

ドラマや映画の中に、彼女たちは理想を求めている。

いつもと同じジャージ姿で、私は気合を入れた。

「よし、ギリギリまでネタ探し頑張ろう！」

自分を含めて、見た人が少しでもこんな恋愛がしてみたい、そう思えるようなドラマになればいいなど、漠然と思った。



約束の打ち合わせの日まで残り一週間ちよつと。ネタ帳は厚みを増したが、私の中ではさっぱり方向性が定まっていなかった。

出版社、お菓子業界、レコード会社、商社、証券・金融会社、旅行会社……

様々な業種や業界をリストアップしたが、未だに主人公と相手役がどんな職種に就いているのかさえ、決まっていない。というのも、私が面白そうだと感じた業種は、既に別のテレビ局が同時期に放送する予定のドラマと被っていたり、数年前に大人気だったドラマと同じだったりしてしまうのだ。

あとは予算の問題もあるので、あまりコストがかかりそうな設定は選びたくない。

「手に職系も悪くはないんだけどね。美容師見習いとか、メイクアップアーティストとか」

メイクさんとモデルの恋物語というのも、なかなか面白そうではある。もちろん、双葉梓がメイクアップアーティストの方だ。

「一応、候補に入れておくか」

ネタ帳に新たなカップリングを追加して、今日もネタ探しのため、街へ赴いた。

美術館に寄った後の帰宅途中、とあるブティックの前に人目を惹く若い男女がいた。

上品なワンピースに身を包んだ女の子は、二十代前半だろうか。明るすぎないブラウンのストレートのサラサラな美髪に、視線が奪われる。

うわ〜超綺麗。枝毛なんてなさそう。少し動いたときに、髪がシャランと効果音を奏でそう。

思わず自分の髪を手で触ってしまった。中身はオジサン私だが、外見は一応見苦しくない程度

には気を遣っている。髪を染めるのは面倒なのでナチュラルな黒髪だけど、日に翳すと少しこげ茶に見えるから重くない。今はミディアムロングの髪を、バナナクリップでまとめていた。

ふたりは、なにやら静かに揉めていそうな空気をかもし出している。痴話げんかかしら？ と思いつつ、あまりじろじろ見るのも失礼なので隣をそっと通りすぎようとしたら、突如伸びて来た手に行く手を阻まれた。

「えっ？」

目線を向ければ、そこには見覚えのある横顔が。高い鼻梁に、綺麗にセットされている黒髪。身長が百六十七センチある私よりも、十センチは高い位置にある頭。骨ばった手に、上質な黒のスーツ。私は思わず目を見開いた。

「これから彼女と食事の約束をしているので。……行きましょう」

「え、えっ？」

その男性は、あのホテルマンの日向さんだった。

こうして私は、訳もわからないまま、彼に連れ去られる羽目になってしまった。

「突然、驚かせてすみません」

レストランの向かい側の席に座った日向さんは、申し訳なさそうに頭を下げた。

「い、いえ！ 特に用事もないので。帰ろうかと思っていたところでしたし……」

そう言うと、日向さんはどこかほっとした様子になった。なんとか社交的な笑みを浮かべている

私は、内心、動揺を抑えるのに必死だった。

街でばったり美男美女に遭遇したと思ったら、いつの間にか巻き込まれていました——なんて、まるでドラマみたいだ。

手首を握られて連れ去られ、彼女の姿が見えなくなると、すぐに日向さんに頭を下げられた。突然無礼なことをして申し訳ない、よろしければお詫びに食事に誘いたい、と。

食事なんてお構いなく！ と遠慮したが、彼は頑として譲らなかつたので、結局戸惑いつつも承諾した。なにが食べたいかと訊かれ、咄嗟に思いついたのが焼き鳥だったが、お高そうなスーツに焼き鳥の匂いをしみつけさせたらまずいと脳内で却下する。

誰かと食事に行くと、最近じゃもっぱら居酒屋だった。それも、安くておいしくて、お酒の種類が豊富なお店。だからオシャレなレストランなんて、獅子王グランドホテルくらいしか思いつかない。

「好き嫌いもアレルギーもないですし、本当になんでも……」

そう答えたら、私ひとりじゃ絶対選ばないような、オシャレな空間のイタリアンレストランに連れて来られた。

すぐに席に案内され、オススメのワインなどを日向さんがウェイターに尋ねて、その後、前菜を頼んだ。

メインはウェイターが告げた今日のオススメの中から選ぶことに。

あの、メニューに値段が書いてないんですけど……

大丈夫か、この状況。確か財布にはまだ諭吉さまが入っているはずだから、なんとかなる……はず？

お酒は飲めるかと訊かれて頷くと、ほどなくして赤ワインのボトルがやってきた。見るからに高級そうなそれは、一本いくらするのだろう。

未だにこのいきさつのまともな説明がないまま、ワインを勧められて一口飲んだ。芳醇な味わいが口に広がり、うまいっ！と声が出そうになる。

実際にはなにも言わなかったのだが、私の表情を的確に読み取ったらしく、日向さんはくすりと微笑んだ。

「お口に合ったようで、よかったです」

美形に真つ直ぐに笑いかけられると、芸能人を見慣れてイケメン免疫が多少はついてはいるはずの私でも、顔が赤くなりそうになった。なんとかこらえつつ、正直に美味しいとワインの感想を告げる。

そして一拍後。日向さんは今日何度目かの謝罪をした。

「強引に誘ってしまつて申し訳ありません。お見苦しい光景も見せてしまいましたね」

お見苦しい光景とは、美男美女が静かに睨み合っていた場面のことだろうか。あれはある意味、眼福だった。相手の女の子、めちゃくちゃ可愛かったし。

「えっと、失礼ですが、なにかトラブルだったんですか？」

たまたま通りすがつた私を巻き込むくらいだ。どうしてもあの場から離れたかつた訳があつたん

だろう。差し支えない程度にでも教えてもらえたら、私も自分がここにいる理由を納得できるかもしれない。

日向さんは軽く嘆息して、柔らかな微笑に苦さをまぜた。

「トラブルと言えば、まあそのような類でしょうか。大したことじゃないのですが、彼女は時折現れては、いろいろ質問攻めしてくるので」

「えっ？ それつてまさか、ストーリー……？」

苦笑した日向さんは、首を横に振つた。どうやら似ているけど違うらしい。先ほどはそのストーリー未満さん(?)に、交際相手の有無を問いただされていたんだとか。彼女と日向さん、一体どんな関係だ。

「近しい知人からの追及に疲れていたところに、私がタイミングよく現れた、んですか？」

「ええ、気づいたら咄嗟に手首を握つてました。申し訳ありません」

またまた謝罪をされて、私は慌てて片手を左右に振つた。

「先ほども言いましたが、私はまったく気にしていません。本当、お気になさらず！」
自分がかさされたわけでもない。

細かい事情はわからないが、まああまり深く尋ねるものじゃないだろう。顔見知り程度だったホテルマンの彼とこうして食事をしているのは、些か奇妙というか、不思議な気分だが。

食事が運ばれてきて、会話が一時中断する。

本日のオススメメニューである、仔牛のソテー、ポルチーニソースかけ。そしてサイドには乾燥

させたトウモロコシの粉を水やバターで煮込んだもの——ポレンタというらしい——が綺麗に盛り立てられている。色鮮やかなトマトのマリナーソースが、黄色のポレンタにかかっている。ポルチーニ茸の匂いに、食欲が刺激された。めちゃくちゃおいしそう……。焼きたてのガーリックブレッドに、このソースをかけてもおいしいかも。

同じメニューを頼んだ日向さんに、「いただきます」と声をかけてから、ナイフとフォークを手にとった。

「おいしい。仔牛は柔らかいし、ソースも濃厚。このポレンタっていうの、初めて食べましたけど、食感がねっとり、ぼつてりしてて、トマトソースによく合いますね」

おいしいを連発してにこにこしていると、日向さんが嬉しそうに微笑んだ。

「イタリアの北部の料理ですね。地方によっては、パスタよりも好まれているんだとか」

へえ、そうなんだ。

流石ホテルマンだ。注文にも会話にも、そつがない。お客様の質問に答えるために、多岐にわたる情報を頭にインプットしているのだろう。

「獅子王ブランドホテルにも、イタリアンレストランって入ってますもんね。あそこでも、このポレンタってありましたっけ？」

訊けば、日向さんは苦笑した。

「残念ながら、うちのシェフは南出身なんですよ。北の料理よりも、南イタリアの料理を多くメニューに載せているのですが。でも、朝比奈様がそんなに気に入られたのでしたら、ぜひうちでも

提供したいですね」

おお、それは嬉しい！ 思わず顔がほころんだ。

が、うん？ ちよつと待って。

「日向さん、あの、今は客じゃありませんし、私相手に様とかはいらないですよ？」

一瞬間流してしまいたいようなほどざらりと呼ばれたけど、こんなところで様付けは恥ずかしい。

ですが——と渋る日向さんに、「普通でいいですから」と念を押し、とりあえず無難にさん付けで呼んでもらうことになった。

プレートのお肉が半分もなくなる頃には、私はすっかりくつろいだ気分になっていた。

最初の緊張感はどこへやら。日向さんとは、普段以上に早く打ち解けられた気がする。家の外なのに、いい感じにほろ酔い気分になれるのがその証拠だ。仕事関係や初めての人とお酒を飲むときは、私はほとんど、酔っ払わない。

流石接客業、というべきか。日向さんは相手を退屈させない話術と、さりげない心配りのスキルをお持ちだった。お水が減ったのにも気づき、すぐに目配せしてウェイターを呼んでくれるなんてことはザラだ。なんていうか、隙がない。

人好きのする微笑みに、ていねいな口調。相手に警戒心を抱かせない空気は、彼の武器だろう。

この人がメーカーなどに勤めて営業に配属されたら、すぐにトップセールスマンになりそうだ。

ドラマの相手役、エリートビジネスマンでみたいないメージはやっぱりいいかも——飲みながら、つい思考が仕事へと傾いた。

食後のデザートにティラミスを食べる。日向さんはコーヒーだけ。私はもちろん、女の子ですから別腹がある。あんだけ食べたのにまだ入るのか……と呆れたり感心したりといった様子が日向さんからは感じられないので、堂々と食べてしまった。まあ、驚かれてもパクパク食べるけど。

思いがけず居心地のいい時間をすごせたため、私はすっかり彼の遠慮がなくなっていた。「日向さん。もしなにか困ったことがあったら、私でよければ力になりますので。お役に立てることがあったら言ってくださいね」

こんなこと、普段自分からは絶対と言わない。基本、自分のことで精一杯な人間が、他人の世話など焼けるはずないと思ってるからだ。

でも、彼の話が面白くて、いろいろと興味を惹かれてしまい、つい気まぐれが発動したらしい。仕事の関係者ではない彼と、もう少しプライベートな会話を楽しみたいとも思ってしまったんだろう。

私の言葉を聞いた日向さんは少し驚いた後、ふわりと破顔し、優しく目尻を下げた。

「ありがとうございます。それでしたら、また私の食事に付き合っていただけですか？」

「ええ、もちろんですとも！」

そんなことならお安い御用だ。彼ならおいしいレストランをたくさん知ってるだろうし、私にとってもありがたい話だ。

あ、でももう少しこう、オシャレ度が低いというか、ナイフとフォークを使うお店じゃなくて、庶民的な小料理屋さんなんかにも行きたいんだけど……。ビールか日本酒がおいしく飲めるところ

なら、なおよし。

一般的な女の子なら、いい感じにムードのあるレストランに行きたがるのだろうけど、私はサラリーマンのおじさまのたまり場的なところで飲むのが好きだ。

「朝比奈さんのお仕事の都合もありますし、やはり平日は難しいでしょうか」

ふと思いついたふうに言われ、私は首を左右に振った。

「いえ、基本いつでも大丈夫です。私は会社勤めじゃなくて、フリーランスで働いてるので。比較的時間の都合はつくし、自由なんですよ」

自由ではあるが、いざドラマの企画が開始したら忙しい。それこそ、いつ呼び出されるかわからないほどに。急に監督から書き直しの指示が入ることがあるので、時間が読めなくなるのだ。今はちょうど一段落ついて新たな企画にお呼ばれされたところだから、多少のゆとりはある。

「フリーランスでお仕事をされているんですか。それは、お忙しいのでしょうかね」

「時期によりますが、今は大丈夫です」

ええ、一応まだ。今後の忙しさは、私の筆の速度と、話の面白さにかかっている。面白くなければ面白くないほど、ダメ出しされて直しを要求されるのだ。

日向さんは、私なんの仕事をしているかなど、深入りしてくることはなかった。

それは正直言って、助かったと思う。

脚本家やってます、なんて言ったら、どんな作品を作っているのかとかも言うことになりそうだ。それはちょっと、照れくさい。

実は私が脚本家をしていることは、限られた人間にしか教えていない。仕事の関係者以外では、家族を除くと、学生の頃からの親友がひとり、前の職場で仲よくなった友人ひとりのみが知っている。脚本家業に専念したいから会社を辞める、なんて、前の会社を退職するとき当然言わなかったのだ、元上司も知らないのだ。

きつと日向さんにはデザイナーとか、広告関係の仕事とかと思われるんだろう。フリーランスと言つて、普通の人はそういう発想をすることが多いみたいだし。

化粧室に行つて戻ってきたら、会計は全部済まされた後だった。手際よさに感心する。なんというか、女性のエスコートに慣れた大人の男性だ。

ごちそう様でした、と頭を下げると、日向さんにはっこり笑いかけてくれた。

「おいしそうに食べる女性との食事は、楽しかったです」

彼の口調から、今までお付き合いしてきた女性たちは、体形を気にして食べる量をセーブしていたのかもしれない、と感じた。

こんなにおいしい料理を全部食べないなんてもったいない。

「ご自宅までタクシーで送りましょう」

「いえいえ、電車まだ動いてますし、大丈夫です」

日向さんの厚意を辞退して、ふたりで駅に向かった。別の線なので、その場でおやすみなさいと挨拶をかわし、彼と別れた。

帰宅ラッシュが少しおさまった時間帯、運よく空いていた席に、どっこいしょと座る。

スマホを手に取り、ディスプレイを見つめた。視線の先には、先ほど交換した日向さんのメールアドレスと、電話番号がある。

家族や仕事関係以外の異性と連絡先を交換したのつて、いつ以来だろう。少なくとも、記憶に残っていないくらいは昔だ。

なんだかくすぐつたい気持ちのまま、私は自分の城へと帰宅した。

部屋着のジャージに着替え、ビールを冷蔵庫から取り出した。ふしゆ、と聞き慣れた音を耳にしつつ、立ったままぐびぐび啣る。そして「ふはあー」と呟いてから、「よっこいせつ」とソファにあぐらをかいた。

「今さらだけど、私いつから、よっこいせとか、どっこいしょとか言うようになったの……」

くしゃみも可愛く「くしゅん」なんてものじゃなく、豪快に「へっふしゅん！」だ。明らかに日々、オジサン化が加速している。

……おかしい。若者が思わず憧れてしまうような恋愛ドラマを書く気であるのに、本当にこんな残念女子である私が、乙女思考になれるのだろうか。

考え始めると止まらない。服装から言動まで、自分のすべてが乙女とかけ離れた存在に思えてきた。

ネタ帳とにらめっこするのも、今日何度目だろう。私は深いため息を吐いて——はたと気づいた。

「うん、無理だって。知らないのに知ったかぶって、恋愛のエキスパートっぽい話なんて書けるわけないんだよ」

どう頑張ったって、こんな私が書いた話はどこかで読んだような王道ものになるか、嘘くさいものになるだろう。視聴者が求めているドキドキ感、そんなありきたりなものでは満たされなはず。

ならば、私が無理してラブロマンスを専門としている先輩方を、真似る必要はないのでは？

「むしろ私っぽい主人公でいいんじゃないの？」

自分のありのままを投影したかのような、ヒロイン。

恋愛下手の初心者で、恋する気持ちがいまいちよくわからない、働く女。

気づけばそろそろ結婚適齢期。周りの結婚ラッシュに押され気味で、置いてけぼり感を食らいつつ、自分ではどうもアクションを起こせない。そんな私のそっくりさんなら、私でも書ける。だってモデルは自分だし。

「となれば、相手役だよ。さっきまでは日向さんみたいなできる男で、つて考えてたけど、もういつそのこと、日向さん本人でよくない？」

今日のこと、日向さんの新たな一面を知ることができた。びっくりしたけど、ありがたいハプニングだ。

エリートホテルマンで、歳は三十ちよつと。身長は目測だけど、百八センチはありそう。

均整の取れた体形に、パリっとしたスーツ姿。スーツが似合う男は、それだけでかっこよく見え

る。いわばスーツマジックだ。まあ日向さんの場合は、もともとすごく素敵だから、スーツマジックでその魅力は神レベルだけど。

「ふたりともホテルで働いてるんだと、あからさますぎるかも？　じゃ、相手がホテル勤務ってことで、主人公は別の職種に就かせて〜」

ああ、そうだよ、この感覚だよ。

楽しくてわくわくしてくる高揚感。書きたい！　新しい世界を作りたい！　と強く思う気持ち。ずっとうんうん唸っていたのは、やはり自分がいまいちと感じていたからだろう。書く本人が楽しくないのに、見る人が楽しい作品を作れるはずがない。

パソコンの前に座り、文字を打ち始めたら止まらなくなった。

次々と情景が浮かび、会話が生まれてくる。主人公と相手役の名前が決まれば、作品の世界が作り出されるのも早い。

一通りの登場人物と、話の流れを大まかに書いたプロットをまとめたとき——気づけば、もう翌日の朝を迎えていた。

データを保存し、あくびをかみ殺す。やばい、書き上げた途端に眠気が……

「見直しは起きてからにしよう」

バリバリに凝った肩と首をストレッチさせてから、私はジャージのままベッドに潜り込んだ。



打ち合わせ当日。私はテレビ局の見慣れた会議室に来ていた。

書き上げたプロットを数日前にメールで送っていたので、集まったメンバーに内容は伝わっている。細かな調整や意見を交換するために、私は今日この場を訪れていた。

「当初はしつとり大人向けのラブロマンス、という要望だったけど、あんたからプロットが送られてきたあとで、双葉梓の事務所側が実はやっぱり……って言い出してきてね。大人っぽいものはもう少し待って、今はまだラブシーンが少なめで明るいものに路線を変更したいっていう。あんたの作ってきた話を、どうやって持ち出そうかと思つてたところだったから、タイミングよかったわ〜」

見た目イケメンなのに、口調も仕事も完璧オネエな恵さんは、近所のおばちゃんのように私の肩をバシんと叩いた。細身だけど男性。地味に痛い。

じんじん痺れる肩をさすりながら、相変わらずテンションの高い恵さんを見やる。

「で、どうでした？ 向こう側の感触としては」

「奈々子先生がこんな話を提案してきていますって持ち出したら、かなり好感触だったのよ。軽快なテンポのラブコメ系が欲しかったみたい。なにより双葉梓本人が『面白そう！』と乗り気なんですって」

「そうですか。それは安心しました」

ふう、と心の中で、額に浮かんだ汗を拭き取る。話と違うじゃないの！とと言われること覚悟で出した案だったが、意外にも受け入れられたらしい。

「まあ、ざっくりとした話の方向性はこんな感じでと、あちらの事務所とは話しているんだけど。あんたたちはどう思う？」

彼はその場にいるスタッフに意見を訊いた。基本カジュアルな格好の彼等は、大体が私と同年代か下かで、私としてもやりやすい。

私が提出した恋愛ドラマ案は、こうだ。

『そこそこ売れてるBL漫画家（または小学生向けの少女漫画家）のもとに、とある企画物の漫画依頼がくる。それはなんと、現代日本人の恋愛離れや深刻な少子化に危機感を抱いた政府が、極秘で出版社に相談したというビッグ・プロジェクト。思わず恋愛がしたくなるような漫画を描いて出版して欲しいというものだ。その白羽の矢が当たったのが、主人公。懇意にしている漫画雑誌の編集長に、この仕事を引き受けてくれと頼まれた。』

が、実はBL（少女）漫画家は三次元で恋をしたことがないので、いろんな意味で無茶だ。一応男女の恋愛を描いたことはあるが、必死で調べてなんとかやっただけ。男同士のカップリングには萌えるのに、現実の主人公の脳は、残念な腐り具合。

その後、アシスタントの女の子たちも巻き込んで、恋愛探しの旅が始まる。

恋とはなに？ リア充って二次元だけじゃないの？

そんな自分の恋にはさっぱり疎い彼女が、ある日エリートホテルマンに出会う。そしてさらに、タイプの違う数名のいい男にも。

彼らとかかわりつつ、脳内で腐れ展開を妄想する主人公。

果たして彼女は、無事に企画の漫画を描き上げられるのか？

恋するトキメキを徐々に知り、その気持ちを反映させた漫画が完成されるまでの話。基本、ラブコメディ」

これについて意見をつのれば、次々とメンバーから声が上がった。

「主人公が普通の会社勤務じゃなくて、漫画家って面白いかも」

「相手役がイケメン紳士なホテルマンですか。確かにホテルのフロントって、カッコいい男性多いですよ〜」

「この、根底にあるのが少子化問題や、若者の恋愛離れてところも現実味があつていいですね。

恋がしたくなる恋愛漫画”の企画を依頼された主人公が、恋愛初心者でさっぱりわからんって苦悩するの、ラブコメっぽい」

「だけどバツクに政府ってのが、現実離れしていてドラマっぽいから、視聴者に見せやすいです」

実に好意的な感想をただけて、くすぐりたい。私は照れ隠しのために、ブラックコーヒーを一口啜った。

若い彼等の中で飛び交う意見を聞きながら、私からもひとつ、気になっていたことを尋ねた。

「恵さん。正直なところ、梓ちゃんはなんて？　ここではBL漫画家が前提なんだけど」

オタクで腐女子。基本、脳内の思考が残念。大人の恋愛に疎い少女漫画家よりも、男女の恋に疎いBL漫画家の方が面白そうと思ひ、あまり知りもしないのに調子に乗っちゃったんだけど……

「ああ、ゲラゲラ笑ってたらしいわよ。しかも、『私、BL大好きです！』とか、衝撃的なカミングアウトまでしてたって」

マジで？　すごいな、梓ちゃん。

私は別に腐っているわけではないんだけど、あの美少女がBL好きだったのは驚きた。

「嫌だと言われたら、無難に小学生女子向けの少女漫画家にしようと思つてたけど。本人が乗り気なら大丈夫ですかね」

「マネージャーは最初、イメージ崩れるとか言つてたけど、本人が構わないって言うから。結局、事務所としてはオツケーらしいわよ」

梓ちゃん、ある意味頼もしいな。

「で、恋がなにかつて模索しながら、数々の男に出会う話になるわけね。一応、ヒロインの恋の相手役は、一番初めに出会ったホテルマンってことでもいいのかしら？」

「その予定です」

今のところはね。

「この恋愛漫画企画を持ってきたお役所の人も、いい感じに接近したら、おいしそう！」

萌ちゃんが呟く案も、すかさずホワイトボードに書かれていく。

気づけば先ほど盛り上がっていたメンバーは、すっかり仕事をしていた。出て来た案をボードに記録していたのだ。流石、恵さんの部下。有能である。

打ち合わせは大いに盛り上がり、基本の方向性はそのままということ、企画案は通ってしまつた。

テレビ局を出た帰り道、あんなに悩んでいたのが嘘のように、私は清々しい気分すがすがで電車に乗った。時刻を確認すれば、まだ夕飯には少し早い六時前。たまには外でラーメンでも食べて帰ろうかな。自宅の最寄り駅より数駅前で降りたところで、タイミングよく電話がかかってきた。

「え、日向さん？」

どうしたんだろうと疑問に思いつつも、電話に出る。

「はい、ま……朝比奈です」

間違えた。先ほどまで麻々原奈々子として仕事をしていたから、ついそう言いそうになった。

気持ちを切り替えて朝比奈潤として対応すると、日向さんは不審に思うこともなかったようで、普通に話し始めた。

『朝比奈さん、お久しぶりです。先日はありがとうございました』

「いえ、こちらこそ！」

あなたのおかげでいいアイデアが浮かびました。感謝感謝。

『いきなりですが……。もし、お時間が空いてましたら』

内心で拝んでいたら、日向さんに今夜食事に行かないかと誘われた。

「えっと、はい、大丈夫ですよ。私でよければ」

一瞬戸惑ってしまったが、彼との話は楽しいし、いいインスピレーションが湧いて来るかも知れないと思ひ、了承した。

脚本家は、積極的に外に出て、いろんな人の話を聞かなければ。そうやって先輩方も、話のネタを掴つかんでいるのだし。

「では、七時半に」と約束を交わして、電話は切れた。

和食は好きかと問われたので、もちろん好きだと返したから、きっと今夜はイタリアンではなく日本食になるんだろう。

「ラーメンは、今度ひとりで食べに行くか」

待ち合わせまで一時間半。こうしちゃられない。

ちようど駅にいたこともあり、私は急いで電車に乗って、自宅へ着替えに戻つたのだった。



どこに行くのかと思つたら、連れて行かれたのは老舗しにせのうなぎ屋さんだった。

賑にぎわっている店内は趣おもむきがある。歴史を感じさせる鮓色あめいろの柱に触ってみれば、とても掌てのひらになじむ感触だった。

誘ってくれた日向さんだったが、食事を始めて少ししたところで、携帯に連絡が入った。急に仕

事で呼び出されてしまい、結局、食事の後でホテルへ戻った。今回も御馳走になってしまったので、次回は私が！と別れ際に言うのと、日向さんは逡巡したものの、柔らかな紳士スマイルを見せた。

『それでは、次は朝比奈さんのオススメのお店に連れて行ってもらいましょうか』
『もちろんです。楽しみにしてください！』

当然、支払いも私が持つからという意味を込めた。次こそは私が御馳走しようと、にやける頬を引き締めながら帰宅する。

が、ちよつと待って。彼に紹介できるような場所、私知ってた？

……庶民的な店しか知らない。

居酒屋のチェーン店なんて連れて行ったら、それこそ注目を浴びて大変だろう。今日だって、一緒に食べてるだけで、周囲の視線がビシバシと……

芸能人でもないのにあれだけ見られるとは、イケメンって大変だ。

お風呂に入りながら、先ほどのうなぎ屋さんでの日向さんとの会話を反芻する。

脳内メモは、彼が話したネタでいっぱいだった。

彼はこの仕事に就いてから、ホテルに泊まると、どうしても仕事目線になってしまうそう。

従業員の接客の仕方、アメニティなどのサービス、レストランで出されるメニューなど、気になつてたまらないという。

そういうわけで、ホテルにいとあまりリラックスできないため、旅行に行ったらほぼずっと外出して動き回り、本当に寝るためだけにホテルは使用しているらしい。

なるほど。つい仕事と関連付けて、調査している気分になっちゃうのね。

これはちよつと使えるかも？一緒に旅行に行つてのに楽しめない相手役と、それが気になる主人公、とか。

これらを参考にして、細かい台詞の調整に使う。

が、なにかが少しだけ胸に刺さった。

「私、完璧、日向さんをネタ目的に使つて……よね」

口に出すと、じわじわと申し訳なさがわき上がってくる。針でチクチクと刺されているみたいだ。うわ、良心の呵責が……！

純粹に彼と会うのは楽しい。でも打算が入っていることも事実だ。

口までお湯に浸かり、ぶくぶくと泡を立てた。お湯が鼻に入る前に、勢いよくバスタブから出る。「申し訳ないけど、もう企画は動き始めてるし、後戻りはできない。次会うとき、正直に言おう」実はあなたを、主人公の相手役のモデルとしたドラマ作ります。もう動いてます、すみません！深く頭を下げる自分を想像する。私が謝るのは構わないが、ドラマになると明かすのは、なかなか勇気があるぞ、これ……

誰だって、いきなりモデルにしますとか言われたら嫌だよね……。もちろん、名前はまったく違うものにするし、誰も日向さんがこの役のモデルとは気づかないはずだが。

でももう、日向さん以外を相手役なんて思えない。主人公が最終的に恋に落ちるのは、彼がいと思うってしまう。ほかの人ともいろいろあるかもしれないが、私の中では決定事項だ。

「ネタにすることは謝って、堂々と使わせてもらおう」

図太いなど自分でも思いつつ、私はお風呂から出た後、早速、日向さんを誘える店をネットですーチし始めた。

それから間もなくして、日向さんをちよつとオシャレな中華レストランに誘った。本当は居酒屋とかに行きたいのだが、人目を気にせず落ち着いて話せるお店はと恵さんに訊いたら、ここを教えられたのだ。ネットは情報が多すぎて、結局いい店を選べなかった。

お値段もお手頃で、味も絶品らしい。隣の席とも適度にスペースがある。

恵さん、素晴らしいチョイスです。ありがとうございます！

「ここは小籠包がー押しなんですって。日向さん、なにか好きなもの、ありますか？」

「そうですね、このエビ餃子もおいしそうだ」

「おこげのスープもありますね。あ、この高菜と豚肉のつた麺もおいしそう」

「それも頼みましょう」

私が真剣に選んでいるのが面白かったのか、日向さんにくすりと笑われてしまった。食い意地が張ったやつと思われたかも……なんて、普通なら恥ずかしがる場面だろうが、私はそんな女の子らしい恥じらいは持ち合わせていない。

注文後、ほどなくして小籠包が現れた。蒸籠に入って出て来た小籠包は、一口サイズで食べやすそう。

箸で慎重につまみ上げ、蓮華に移す。熱々であろうそれに数回息をふきかけて、ぱくり。

じゅわりとした肉汁が薄い皮から溢れ出てきて、おいしさのあまり目を見開いた。

「お、おいしい……」

肉汁ジュシー！

これは絶品だ。恵さんが太鼓判を押すだけある。

日向さんも満足そうな顔をしている。

「久しぶりです、こんな小籠包は」

よかった、お気に召したようだ。

まずは第一関門クリアだ。おいしい食事で心を開かせてからの、カミングアウト。

気が乗らない話は食事の後にして、今はおいしく食べよう。

その後出て来たエビ餃子は、エビがふりっふりで、酢醤油とよく合った。また、高菜と豚肉の麺も、あっさりしたスープが胃に優しい。

ふたりじゃ多いかと思われた量は、いつの間にかすべて空になっていた。

ジャスミン茶を啜りながら、食後の休息。またここに食べに来ようと思いつながらも、私はいつ謝罪を切り出すべきか悩んでいた。

ちらりと目線のみで、目の前に座る日向さんを見やる。

きつちりとダークカラーのスーツにネクタイを纏う彼は、どこから見ても完璧な紳士だ。スーツ

の袖から覗く腕時計のはまった手首と、ジャスミン茶の湯呑み茶碗を持つ骨ばった手がなんともセクシー。男らしい骨が浮き出た手は、なかなか目を奪われる。

彼の優雅な仕草にしばし見惚れた後、私は意を決した。

「あの、すみません日向さん」

「はい」

にこりと笑う姿を捉えた一拍後、がばり、と頭を下げた。

「申し訳ありません……！」

「はい？」

彼の困惑した声をきつかけに、私は顔を上げ怒涛のように話し始めた。

「私、実は勝手に日向さんでネタ探しをしました！ 仕事で煮詰まっていたときに日向さんと出会って、あのときは特になんとも思っただけなんですけど、考えれば考えるほど日向さんは理想的だなんて思ってしまったって、」

「理想的？」

訝しむ声が聞こえる。片眉を綺麗に上げた彼に、「はい！」と体育会系のノリで頷く。

「理想的な、主人公のヒーロー像です！」

「……」

沈黙が流れた。

ああ、やっぱり怒るよね……。いきなりネタに使ったとか知らされれば、普通いい気はしない。

しかし小さく嘆息した日向さんの口からは、冷静な声が出た。

「ちょっと仰ってる意味がわかりませんが。ネタっていうのは？」

ごくりと唾を呑み込み、私は「ドラマです」と答えた。

「すみません、実は私、職業は脚本家をしてまして。新企画を任されたんですけど、今までのジャンルとはまったく畑違いの、ラブロマンス系を書くことになったんです。大人の恋愛なんて、自分にはさっぱり縁遠い世界なので、どんな主人公と相手役がいいのかも見当がつかず、日向さんと食事に行くようになってこんな男性がいいな、って」

「ドラマというのは、テレビドラマですか？」

「はい、そうです」

「そのテレビドラマの男性像について、私からアイディアを得ていたってことですか？」

「はい！」

「そこに特別な感情は込められていない、と」

「？ はい」

ネタ提供者という意味でなら、彼の存在は特別と言えるだろう。だが、特別な「感情」は、別にない。

勢いよくすべての質問に答えれば、無言が返って来た。

沈黙が辛い。このままにも言わずにいるのは流石に不誠実かと思い、私は再び、すみませんと頭を下げた。が、今度は「ふう」と大きく息を吐いた音が伝わってきた。

う、やばい。怒っていらつしやる……

目を伏せて視線を泳がせていると、日向さんが動いた気配を感じた。

視線を上げれば、片手でおもむろに髪を乱している姿。

すつきりと、後ろに流すようにセットされていた前髪が、ぱらりと額や頬にかかる。艶っぽい黒髪と、その髪をかき乱す姿に、男の色気を感じてしまった。何故か心臓が跳ねる。

そして彼は今度はネクタイの結び目に人差し指を入れて、ぐいっと下げた。

一気に崩された日向さんの姿に、目が点になる。

いや、似合うけどさあ。むしろ、にこにこ顔が消えた冷静な眼差しとか、ドキッとするほどっこいいし、周りの女の子の黄色い悲鳴が今にも聞こえてきそうだけでも。

何故あなた、そんなことをいきなりするの。

乱れた髪とネクタイで、男性はこんなに印象が変わるものなのかと呆然としてみると、ふいに日向さんが目を細めて私を見つめてきた。唇は弧を描いているが、目がまったく笑っていない。

普段、温厚で怒らない人が怒ると怖いというのは、あながち間違いはなかった。

喉の奥でくつくつ笑うその人には、先ほどまでの穏やかな空気が一切ない。彼は黒い笑みを浮かべ、色香が滲む声を出した。

「へえ？ なるほど、知らない間に利用されていたというわけですか」

びくり、と肩が震える。漂う緊張感が半端ない。

今までの柔らかな声音は、もはや影も形もなかった。

あまりの変化に戸惑っていると、日向さんが私に力強い視線を投げてきた。

「そんなに困っているなら、私が大人の恋愛を教えてあげますよ」

「え……？」

今この人、なんて言った？

「ひゅ、日向さん……？ キャラ、違いますか」

まさかと思いますが、こつちが素ですか。

人当たりのいい貴公子から、冷徹な皇帝に変化したかのよう。滲み出る黒さに、寒気がした。「これが本来の私ですが」

まとう気配が違いすぎる！ 前のままで、十分私はよかったですけど——
なんて、咄嗟に言い返すこともできず。私の動きは、彼の捕食者の如き目に封じられた。

「知りたいんですよね？ 大人の恋愛。ネタに困ってるなら、協力してさしあげますよ」

「大人の、恋愛……」

思わず唾を呑み込んでしまう。

知りたいかと言われれば、当然知りたい。むしろ積極的にリサーチしていかなければならないジャンルだ。それが今回、恋愛をテーマに書く私の試練と言える。

誰かの助言や助力が得られるなら、願ったり叶ったりだ。

私は恋愛のエキスパートだと思われる彼を見つめ返した。

「い、いいんですか？」